

人類の定住に関する考察 ——物質文化との関係に着目して——

渡部 森哉

キーワード

神殿、半地下式広場、竪穴式住居、土器、ワカ

1. はじめに

現代の事例を対象とした人類学的研究において定住生活と移動生活を比較する際、人はなぜ移動するのかに重点の置かれた議論が多いように思われる。それは研究者にとって定住が当たり前の生活であり、むしろ移動が特別な行為であるという状況を前提としているからである。しかしながら人類史を繙けば、人間が定住と呼ばれる生活を送り始めたのはごく最近のことに過ぎない。むしろ問うべきは、なぜ定住したのかである (cf. 西田 2007)。そして考古学では、定住は頻繁に扱われてきたテーマであり、農耕牧畜などの生業と関連づけられて議論されてきた。

本論文では、長期的タイムスパンで、物質文化との関係に着目して人間の定住について考察する。

2. 定住、住居

人類が直立二足歩行を始めたのが 800-700 万年前、そしていくつもの進化の過程を経て今から 20 万年前にはホモ・サピエンスが誕生したとされる。しかしそれからもしばらくは移動生活を続け、定住生活をする人々が増え始めたのは 1 万年ほど前である。その頃に定住を始めた地域の例として、西アジアや、日本の縄文時代を挙げることができる。定住は考古学において農耕と結びつけられがちである。しかし、ゴードン・チャイルドが述べるように「農耕の採用と定住生活の採用を混同してはならない」(チャイルド 1957 (1936): 上 119)。たしかに日本の縄文時代や北米大陸西海岸の人々など、定住をしている狩猟採集民や漁労民の例をいくつも挙げることができる。

アメリカ大陸に人類が住み始めたのは今から 1 万 4000 年前ほど、北米大陸を南下しクローヴィス文化が始まったのは 1 万 1500 年頃であり、それから 1000 年ほどで南米大陸最南端まで拡散した (大貫・関 1992; 関 1995, 2012, 2013)。クローヴィス人は約 1000 年の間に南北アメリカ大陸を縦断したことになり、それまでの移動のスピードと比較すれば、人類

史における特別な出来事であったとも言える¹。しかし人類の移住の痕跡としては石器のみが見つかり、人骨はほとんど確認できない。元々の人口が少なかったことが最大の理由であろう。また、南米大陸西部の太平洋沿いでは、この当時の遺跡があると思われる土地の多くが現在海の中にあるため、人骨を掘り当てるのが難しいのかもしれない。また、一般に移動生活をする狩猟採集民は特定の場に墓を作ることが少ないということも理由として考える必要があるだろう。日本の場合も同様に旧石器時代の人骨はほとんど見つからない。移動性の高い生活を送っている人々は墓を作ることが少なかったからであると考えられるし、酸性土壌のため、たとえ墓があったとしても骨は溶けて残存しない。アメリカ大陸の場合も日本の場合も、人骨が見つからないのは、特定の場所に墓を作ることが少ないからであり、それは移動性の高い狩猟採集生活の人々の特徴を示しているように思える。

ではなぜホモ・サピエンスは移動性の高い生活を長い期間続けたのであろうか。その要因をネオテニーという概念で説明する場合がある (cf. 後藤 2003: 246)。霊長類などは幼児期に周りのものに関心を示すが成熟するとそうした好奇心が失せる。しかし人間の場合、大人になっても幼児期と同様に興味関心を持ち続ける。これが行動面でのネオテニーの 1 つの特徴である。確かにアメリカ大陸の事例を見てみると、温暖な過ごしやすいところに留まったのではなく、南米大陸最南端の厳しい環境のパタゴニアまで移動したのであるから、ホモ・サピエンス特有の思考がそうさせた、つまり新しい場所への知的好奇心によって移動したのだと解釈したくなる。一方、更新世末期にアメリカ大陸へ移住したのは狩猟採集民であり、彼らがその当時棲息していた大型動物を追って南米最先端まで短期間で拡散したと考えることもできる。人類の拡散と大型動物の絶滅が時期的にほぼ一致するという現象を、ポール・マーティンは「電撃戦モデル」という言葉で説明している (Martin 1973)。いずれにせよ異なる環境を渡り歩き移動を続ける人類の特徴は、ある一定の環境の中から外へ出なかった他の類人猿とは大きく異なる (山極 2013)。

アメリカ大陸の先住民は、旧世界の後期旧石器時代に対応する技術を持った人々であり、石刃技法を有し、投槍器を用いた。また、アメリカ大陸のイヌは北米大陸のオオカミを家畜化したのではなく、アジアのオオカミを家畜化したものであることが DNA の分析から分かっている (Leonard et al. 2002; Savolainen et al. 2002)。つまりアメリカ大陸に移住した人々がアジアからイヌを連れてきたと考えられる。北米大陸のクローヴィス文化に続くフォールサム文化 (10500-9500 年前) などでは押圧剥離の痕跡が認められ、旧世界の文化との連続性が明らかである (岡田 1995)。しかし、こうしたアメリカ大陸に渡った人々は、その後独自の道を歩むことになる。気候の温暖化に伴う海面上昇のため、アメリカ大陸とシベリアとの間に海峡ができ北米大陸とユーラシアが切り離されたためである。そして、両方の地域で、定住化、農耕の開始、複雑社会の誕生、といった共通の展開が独立して見られたことは特筆すべきである。移動することはホモ・サピエンスの特徴であるが、定住することもやはりホモ・サピエンスの共通性であり、いくつかの条件が揃ったところで定住に進むと考えられる。その条件の 1 つとして、どの程度の人口になると定住化に進むのかを考える

¹ ただし、クローヴィス人以前に人類が移住していた可能性も指摘されている。ただし、それらの人々が子孫を残すことができたかは不明である。ある程度の数の人口が維持されたのはクローヴィス文化以降の人々で間違いはないであろう。

必要もあろう。通常は定住をしてから人口が増加したと説明されるが、逆に人口が増えたら移動生活がしにくくなるため定住するということもあろう。これまで人口増加の直接的要因としては農耕が挙げられ、人口増加の前提として定住が暗黙のうちに想定されていたが、移動生活をする人々の人口増加の要因を分けることで議論が整理できるであろう。

約1万年前という時期が、寒冷な更新世から温暖な完新世への移行と平行するため、考古学では定住は環境変化と結びつけられて説明されてきた。つまり、気候が温暖化することで、植物の生育が促され、単位面積あたりの食料の量が増える。必要な量の食べ物を集めるために移動しなければならない距離は短くなる。そしてそれに伴い、動物の個体数も増えるため、食料は増える。移動する範囲が狭くなることで、植物の生育プロセスを観察する機会が増え、それが植物の栽培化に繋がっていったのだと説明される(ベルウッド 2008(2005): 27-40; 西田 2007)。こうしたストーリーに従うと、定住は植物質の食料や農耕と結びつけられがちになる。

しかし、類似した環境でも狩猟採集に依存し移動生活続ける人々と定住民がいる。なぜ移動ではなく定住し始めたのかは、環境のみならず、それ以外の要因と組み合わせて説明する必要があるであろう。定住生活に伴う道具として取り扱われる土器も、ロシア極東地域などで更新世の間に製作が始まったことが現在では分かっている(今村 2002: 12)。何か単独の要因に帰すのではなく、量的な説明、傾向の説明をする事が建設的である。農耕が定住と1対1で対応するわけではないが、9割ぐらいの農耕民が定住しているのであれば、農耕と定住を結びつける説明は大枠としては正しい。分析を精緻化するため、大枠からはみ出る部分を検討し、それを組み込んだ形で説明モデルを改良すれば良い。

まず農耕牧畜と直接結びつかずに定住を始めた例として、日本の縄文時代を取り上げてみよう。縄文時代には狩猟採集生活を営む人々が、土器製作を始め、それを用いて煮沸し植物質の食料を効率的に摂取することができるようになった(cf. 藤尾 2002: 74-76; 井口 2012: 120-125)。土器の利用によって定住が可能になり、あるいは逆に定住生活に伴い土器の保持と使用が可能になる(今村 2002: 16)。そして最古の土器は今から12000年前よりも古くに遡るというデータもあり(今村 2002: 12)、更新世から完新世への移行に伴って土器製作が始まったわけではない。そして、縄文時代草創期には主に洞窟などで生活していたようであるが、早期になると日本列島各地で竪穴式住居が造られ始める。縄文時代には多くの打製石斧が見つかるが、それらは木を切る道具というよりも、穴を掘る道具なのである。土器を用いて煮沸するための炉の跡が多く見つかる。この竪穴式住居は定住生活の証拠と見なすことができるが、なぜ穴を掘るのであろうか。

竪穴式住居は一般的に寒さ対策に優れた構造とされる。冬場の明け方に放射冷却で地面が凍るが、それを避ける効果がある(藤森 2005: 83)。地面から約40cm掘り下げるのは、凍結深度と関連する。従って、縄文時代の定住は、狩猟採集という生業と関連するわけではなく、土器製作や寒さ対策と関係があると言える。一般に住居は暑いところというよりも、むしろ寒いところで生活するための工夫であると考えられる。少なくとも寒さ対策のしっかりした住居の方が、造るのに手間暇がかかることは確かである。定住化は、単独の要素の結果ではない。縄文時代の場合は、寒さ対策の他、それ以前にすでにあった土器製作と、それを用いて調理する食料の増加が結びつくことが、定住化が進んだ要因と説明できるであ

ろう。寒いところの人々が全て定住しているわけではなく、例えば、寒いところでもイヌイットのように移動生活をする人々もいるが、一般に、暑いところの人々ほど移動性は高いという傾向は、現在の狩猟採集民の分布などから定量的に表すこともできよう。そもそも暑いところでは、気候対策のための手の込んだ住居は必要ないため、暑さ対策で定住ということは考えにくく、一カ所に留まる理由は住居の必要性以外に求める必要があるだろう。あくまで寒さ対策と植物質の食料の利用が組み合わさることが、縄文時代の定住の 1 つのパターンであった。また河川漁撈により定住化傾向が強まるというパターンもある（今村 2002）。

縄文時代の特異性は、ただ単にある場所にそのまま留まり定住するだけではなく、その土地、地面を加工し、竪穴式住居を造ることにある。これが縄文時代の定住の主要な要素であり、この点をペルーにおける定住を考える際にも手がかりとして注目したい。なぜならペルー最古の神殿の建築要素の 1 つが、地面を掘り込み造った半地下式の広場であり、少なくとも形態上は竪穴式住居と類似しているからである。つまりそこに住むという行為だけでなく、土地を加工するという行為が重要であり、それは結果的に土地に印をつける行為にもなる。穴を掘らず柱とそれを葺く草のみの簡易的な住居であれば、造ることも場所を変えることも比較的容易であるが、穴を掘った住居はそうはいかず、同じ場所に留まる期間が長くなり、定住性が高くなる。定住と移動生活は、二項対立的にではなく、程度の問題として捉えることが適切であろう。

特定の場を聖地と見なす例はどこにでもある。その特徴は定住民のみならず、移動生活をする狩猟採集民にも同様に認められる。しかし定住生活の場合、自分が生活する場が特別な場として加わり、場に対する感覚が変化する。そのことが特定の場に作られた墓が増加する要因の 1 つであろう。遺体が移動させられることがあっても、墓という施設自体が移動することは稀である。

人間は特定の場を点と点の関係として認識する。トポロジーに基づく空間認識（topological map）は、面による空間認識である地図（topographical map）作成以前の人間の特徴であるが、それぞれの場の意味づけが定住生活によって変化していったと考えられる。そして移動の要因も、点と点の関係で考えればよく分かる。大きな地理的範囲の中で現在地を認識するのではなく、2 点間の関係を連続的に繋げていくことで、結果的に移動の範囲が大きくなる。それは網状の空間認識と説明できるであろう。

一般に移動生活をしている場合は、墓を作ることは多くない。先述のように日本の場合は酸性のローム層が厚く堆積しており人骨は残らず、旧石器時代の人骨はほとんど検出されない。縄文時代になってようやく墓の痕跡が認められるが、多くは貝塚の中から発見される。住居が放棄後に貝塚に転化することが多くあるが、その場に墓が作られていることから、そこに特別な意味を見出していたと考えられる。貝塚はアルカリ性で人骨が残るということが強調されるが、そもそも特定の場に墓を作ることが重要なのである。

墓の登場から、人と場の関係という視点を提示した。次に場所性の問題を、より掘り下げて考えてみたい。竪穴式住居や、アンデスの半地下式広場など、穴を掘ることによって土地に印をつけるという行為と、建物を造るということを組み合わせて考えていきたい。

3. 場所、建物、人

地球上には多くの場がある。それを意味づけているのは人間自身であり、人間の認識である。自然の地形が特有の特徴を有している場合があるが、人間による意味づけがなければ、ただの地形、空間に過ぎない。ここで議論を展開したいのは、場所と建物の関係についてである。手がかりとしてアンデス形成期（前 3000-50 年）の神殿（Seki (ed.) 2014）や、トルコのギョベクリ・テペ遺跡（三宅 2015）を取り上げてみたい。

これまで考古学では、マルクス主義的な枠組みが説明に用いられることが多かった。人類の社会変化のモデルを体系的にまとめ上げたのがゴードン・チャイルドであり、現在でも彼のモデルは批判的に検討され、その意味で議論の基準であり続けていると言える。彼の説明の枠組みは次のようになる（チャイルド 1957 (1936)）。人類史において、新石器革命、都市革命という重要な出来事があった。新石器革命は農業革命とも呼ばれるが、農耕牧畜によって定住生活が可能となり、土器製作が始まった。指標となる磨製石器（磨製石斧）は木を切り倒す斧であり、それは住居を建てる建築材を得るための道具であった。主に土を掘るための道具と考えられる打製石斧とは、同じ石斧でも用途が異なっている。そして農耕牧畜技術の進展により、食料などの余剰生産物が生まれ、都市が誕生し、それに伴い宮殿や神殿など公共建造物が出現する。

以上がチャイルドの枠組みである。ヨーロッパを中心にした枠組みは、農耕に絶対的な価値を見だし、文化もそもそも耕すという単語に由来することはよく知られた事実である。さらにはイギリスの著名な考古学者コリン・レンフリューは、インドヨーロッパ語族が広まったのは農耕技術のおかげであると喝破する（レンフリュー 1993 (1987)）。

しかしながらこうしたヨーロッパの枠組みがそのまま他の地域に当てはまるわけではない。例えば西アジアでは、土器製作以前から農耕が始まっていた（藤本 2007a）。しかしそれは新石器革命の要素が時間差を伴って現れることを示しているのであり、チャイルドの枠組みが大きく揺らぐことはなかった。

1960 年にアンデスのペルー北高地のコトシュ遺跡（図 1）が発掘されると、神殿という公共建造物が土器製作よりも前に現れたことが明らかとなった（Izumi & Sono (eds.) 1963; Izumi & Terada (eds.) 1972）。それは、新石器革命の要素と都市革命の要素の前後関係が逆になっている例であり、チャイルドの枠組みの有用性が根本的に問われることとなった。しかし、その後しばらくはアンデスの例外的な事例として扱われた。むしろ逆に、土器はないが農耕は行われていたという主張が強くなった（cf. Haas & Cremer 2012）。

アンデスにおける先土器時代の神殿の事例が例外ではないということは、トルコのギョベクリテペ遺跡の発掘調査などによって明らかになりつつある（三宅 2015）。それは狩猟採集民の時代に建設された祭祀センターと考えられている。単なる神殿ではなく住居としての機能も備えていたという主張もあるが（Banning 2011）、いずれにせよ儀礼的性格が強いことには間違いない。アンデスの場合は先土器時代に農耕によってワタやヒョウタンを栽培していたことが分かっているので、西アジアは狩猟生活の割合がより高い典型的な例と言える。

現在ではアンデス最古の神殿は海岸地帯で確認されている（Haas & Cremer 2006）。ワタやヒョウタンを栽培していたとしても、かなりの部分を漁撈に依存した人々であった。そして漁撈民は、農耕民や採集民より移動のスピードが高いことが知られている（Lahr &

Foley 1994; Stringer 2000; Appenzeller 2012; Oppenheimer 2009; 米田 2013)。狩猟民は、土地で生育する植物に対する知識が必要であるが、海は繋がっているため、漁撈の技術は汎用性が高く移動先でもほぼ同じように利用できるからである。ティム・アッペンツェラーはこれを「海岸特急(Coastal Express)」という言葉で表現している(Appenzeller 2012)。

そのため、アンデス海岸地帯で神殿を造り始めた人々は移動性の高い人々であったと考えられる。定住が神殿の建設よりも先行するか、結果的に神殿を造り始めることによって定住したのかはあまりはっきりしないが、例えばペルー中央海岸のパロマ遺跡(図1)の漁村などは、最古の神殿群のある地域からは離れている(Quilter 1989)。神殿建設とほぼ平行して、ワタやヒョウタンを主とする農耕が始まったとされるため、農耕の結果、定住、そして神殿建設という単純な流れではないようである。トウモロコシについても形成期早期の前3000-1800年頃まで遡るという可能性が指摘されているが(Haas et al. 2013)、たとえそうだとすると量は少ない。確実な証拠が安定的に認められるのは形成期中期(前1200-800年)からである(Ikehara et al. 2013)。またアンデスでは比較的狭い範囲内にある高度差による多様な環境帯を移動することで自給自足生活を志向した(Murra 1972)。そのため、物々交換の仕組みは高度に発達せず、貨幣経済、市場の存在は明らかではなく、少なくとも物資を運び交換することによって利益を得る商人はいなかったと考えられている(Ramírez 2007)。物資を運ぶ人々はいたが、彼らは王や首長に与えられた役割をこなしていただけたと考えられる。それは狭い範囲に多様な環境が隣接しているため、1つの集団が多様な環境を多角的に利用できるという条件に着目されてきたが、それだけではなく、元々漁撈民がもっていた、移動を志向する傾向をも示しているのかもしれない。

アンデス形成期研究では、議論は神殿という宗教建造物の意義に向けられることが多いが(Seki (ed.) 2014; 加藤・関(編) 1998)、ここでは神殿と定住の関係について考えてみたい。神殿の前提として定住生活があるのであろうか。チャイルド的な考え方では、定住生活が始まり、集住の度合いが高まり都市が形成され、公共建造物が造られる。しかしながらそうした枠組みではもはや説明できない事例が多く報告されている。西アジアのギョベクリ・テペは移動性の高い狩猟採集民が建設したと考えられるし(三宅 2015; Schmidt 2009)、アンデス形成期の神殿を建設した人々もかなり移動性が高かったであろう。逆に、建物を建てたから逆に定住化が進んだ、という点も指摘できる。マヤ文明の始まりの指標とされる公共建造物の建設開始は前1000年頃まで遡るが、その頃すでに農耕、土器製作が始まっていたが、農民だけでなく移動民もいたことは重要である(Inomata et al. 2015)。

そうすると、定住をし始めるのは、農耕などの生業、環境のみでは説明できないことになる。しかしアンデスや西アジアにおいて初期の公共建造物が神殿であるからといって、イデオロギー的要因の方が重要であった、と単純に説明できるわけではないだろう。同様に、移動することはホモ・サピエンスの思考によるが、定住も同様に、移動をしたくないという欲求が生じそのように思考し行動したと考えるのも簡単すぎる。あくまで結果として定住が始まったと考えることが適切であろう。

4. アンデスにおける場の概念、空間認識

次に定住について、場所性に注目して考えてみたい。どこに定住するのか、そして場をど

のように認識するのか。日本では「どこのひと」という説明で出身を表す。非常に場所にこだわった文化の1つである。例えば祖父江孝男の『県民性—文化人類学的考察』(祖父江 1971)はそれを考察した著書である。そしてアンデスも場所に対して特異な感性を持つ文化である。

アンデス共同体の単位はアイリュと呼ばれる。それは人類学の用語を用いて説明すればクランであり、共通の祖先を有すると考える集団のことである。そしてその祖先は特定の場所から出てきたと考える。その場をアンデスの人々はパカリナと呼んだ(アリアーガ 1984 (1621))。もう少し広く説明すれば、パカリナとは数あるワカの1つである。ワカとは、山、泉、川の合流地点など自然の地形にある聖なるものと捉えられる物体のことであり、信仰の対象であった。アンデスにおける信仰は、神格を人格化し図像に表すようなメソアメリカの宗教とは異なり、むしろ日本の神道に似た考えである。そしてそこから展開して、動かすことのできる物体もワカとして捉えられることもある。そして数あるワカのうち、共同体の祖先が出てきたと考えられるのがパカリナとなる。

ワカとは物質そのものである(Salomon 1991; 渡部 2017)。ワカを一義的に抽象的な聖なる存在として捉え、それが特定の場に宿ると考えるのは正しくない。また超自然的と表現する研究者もいるが、アンデスでは人間も自然の一部と考えられるため、ワカとは「超人間的なもの」と説明する方が適切である。こうした信仰、儀礼と結びついた場所性がアンデスの特徴の1つである。そして各共同体はワカの力を体現する首長が中心となった社会である。各社会の空間的中心はワカであり明瞭であるが、その外延、境界は不明瞭である。換言すれば、社会間で地理的境界の線が引けるのではなく、人間という点の集合が社会の範囲である(Ramírez 2001, 2005)。

空間の概念を考えるため、例としてインカ帝国の首都クスコ(図1)のセケ体系を取り上げてみよう(Bauer 1998; Zuidema 1964)。人類学では、空間分析を行う際、線を引いて面に分けて考えることが多い。しかし、そのような方法では適切に説明できない。インカ帝国は4つのスユから構成されるため、多くの研究者はクスコ内の各スユの範囲を線で区切って定めようとする(Pärssinen 1992)。あるいはハナン・クスコ(上クスコ)とウリン・クスコ(下クスコ)に2分されると想定しその境界線を定めようとする²(cf. Bauer 2004; D'Altroy 2015: Figure 7.2)。クスコにおいては41本のセケと呼ばれる想像上の線があり、それが4つのスユのいずれかに帰属する。セケという線は複数のワカをつないだ線であり、点の繋がりである。しかしセケとセケの間の空間は属性が指定されない。想像上の線であるセケは分断の線ではなく、いわば中心の線なのである。さらに細かく説明すれば、各ワカの属性は決まっているが、ワカと認識されない空間の帰属は明示されていない。従って、クスコを含むアンデスにおいては、ある社会の境界という概念は明確ではなく、起点となる点から一番遠い点という認識があるのみである。しかも各方向の最遠の点がそれぞれ線で繋がるように認識されるわけでもない。こうした特徴は中米のマヤ文化の事例とも共通する(大越 2003)。アンデスの人々にとって、人間の紐帯が社会であるのと同様に、空間もやはり

² ブライアン・バウアーはコリカンチャ(太陽の神殿)をハナン・クスコとウリン・クスコの境界とし、テレンス・ダルトロイはハウカイパタ広場を境界としている。しかしこのように面として空間分析すること自体が、アンデスではうまくいかない。

面としてではなく、点の集合として捉えられていた。空間はワカという点の集合であり、社会は人間という点の集合である。

ここまでアンデスにおける空間認識について説明してきたが、次に場と人間との関係について考察してみたい。人間集団の帰属は場所だけではなく、その対面状況によって決まる。例えば民族集団としての帰属が明瞭な場合もあれば、4つのスユへの帰属もある（Julien 2004）。状況依存的な、いわば分節的な特徴が認められる。また民族集団は、フヌ（万）、ワランガ（千）、パチャカ（百）といった下位行政単位に分かれる。

そして、インカ帝国の支配下の民族集団は1つの領地に留まっていたかというところではなく、帝国内を移動させられた。移動させられた人々の数は全体の4割になるという試算もある（ダルトロイ 2012: 143）。そして移動先では帽子と衣服によって民族集団の識別がなされた（アコスタ 1966: 下 309; ガルシラソ 2006: 二 283-284）。インカ帝国の支配下における人間集団の大規模な移動は、アンデスにおける場所と人の関係を考える際に鍵となる。移動先ではタンプという、地方行政のための施設を中心に労働したと想定されているが、もともと移動前には町や大規模な集落に集まっていたわけではない。タンプを考古学者は行政センターと呼ぶ。移動前は集住の傾向は弱く、逆に移動先の行政センター、あるいはその周辺でまとまるという状況が想定できる。アンデスの人々は定住生活をするものの、大規模な集落は形成しなかった。この傾向は現代のアンデス山岳地帯でも認められる。

もともとアンデスでは人の移動が顕著であった。アンデスの基本は自給自足経済である。狭い範囲に異なる環境が隣接しているため、他の集団と生産物を交換するのではなく、自らが適切な環境帯に赴き栽培、獲得する（Murra 1972）。つまりモノを動かすのではなく人を動かすのがアンデスの特徴なのである。そのため、物々交換の程度は低く、貨幣経済、市場などは発達しなかった。移動しなくても物々交換で必要物資を得ることができれば定住性は高まるが、逆にアンデスの自給自足的生活の場合、定住性は弱くなる。このことが、集落が発達せず人々は分散して生活する傾向が強いというアンデスの一般的な特徴を産み出す1つの要因であろう。文化人類学者の稲村哲也は、アンデスでは農耕が移動性と結びついており、牧畜がむしろ定住的であると説明する（稲村 1995）。動物は特定の環境に適応するため、移動するとしても同じ環境帯内部であるため、移動範囲は狭くなるためである。

アンデスではそれぞれの地域、場所で中心となる大規模な建物は、神殿や行政センターなどであり、多くの人間が恒常的に生活する場としての都市は発達しなかったし、儀礼的な大遺跡でも数百年で放棄された（マコフスキ 2012; 渡部 2014）。どこの人間というアイデンティティがあったと想定しても、それはワカを基準とするものであり、都市や行政センターを中心とするアイデンティティはあったかどうかは不明瞭である。ただし民族集団の名称が土地や行政センターの名称と一致することもある。例えばティティカカ湖周辺では、コリャ族が生活しており、ハトゥン・コリャ（図1）という行政センターがあった。一方、同じくティティカカ湖周辺では、ルパカ族という名称はあるがルパカの名称を関した行政センターはなく、行政センターの1つであるチュクイト（図1）の名称を冠したチュクイト族という民族はない。民族集団の名称と行政センターの名称が一致する場合はどのような場合なのか、今後整理する必要がある。そもそもインカ帝国の行政センターという政治的な場に集められた人間は、国家の政策で移動させられた人々であり、各民族集団が互いに識別されていた。だからこそ、1つの場（都市）を媒介としたアイデンティティは構築されにくいと

想定できる。

一言で定住といっても、そのバックグラウンド、実態はかなり異なる。西アジアやヨーロッパでは、同じ環境帯が水平に広がる場合が多い。その場合、1つの場が定点となり、他の集団と食料などの物資を交換する。そして物々交換する場が発展する。東アジアについては、政治的理由によって都城が建設され、首都などは都城という性格を有し、その場所は移動するが、首都である期間はその場に人口は集中する（藤本 2007b）。日本の城下町も同様の特徴を示す。身分の違いはあるにせよ、1つの場に結びついたアイデンティティが認識されることは、先スペイン期のアンデスとは異なる点である³。また、インカ帝国の地方行政センターがスペインによる征服後、放棄されたことも示唆的である（渡部 2014）。

他地域と比較し他場合、アンデスでは人間集団のまとまりの枠がより強く、同じ単位の人々は同一空間に集住するのではなく、小さな複数の空間単位に分散する（Ramírez 2005）。逆に1つの場、比較的狭い範囲に複数の集団が共存する場合もある。中心から見れば飛び地が複数あると見えるが、全体を俯瞰すると各集団の飛び地が特定の範囲内に共存することも説明できる。移動が頻繁に行われることから、その帰属は空間よりも、人間集団に比重が置かれている。ホームという概念を用いるとしても、それは空間に固定されるものではなく、空間を共有することと必ずしも連動するわけではない。同じ共同体の人間であるという立ち位置こそがホームと想定できる。

しかしながら一義的には、アンデスの各共同体の中心はワカであり、中心点は空間に固定されている。だからそこに帰属意識があるとも言える。しかしそこは自分のルーツに関わる場であり、あくまで先祖様の場所（過去）として認識される。オリジンとしての場と、現在活動する場は異なる⁴。過去と現在という二項対立は、無文字社会の神話の語りなどに認められるが、場の認識についてもそのような時間の認識を導入することが有効であろう。アンデスの人々は過去の間、点を共有しているが、分散し生活している。

また、集団のまとまりは固定的ではなく、分断統合を繰り返す。例えばインカ帝国の支配下の民族集団単位は、支配下で新たに再編成された結果であった（渡部 2010）。インカ王族も一枚岩ではなく、王位継承者として新たにインカ王が即位した場合、創始者として新たに親族集団を創出し、死後、王はミイラとされパナカは存続した。パナカとはインカ族版の親族集団アイリュの名称であり、スペイン人侵入時に10以上のパナカがあったとされる（cf. Zuidema 1964）。

5. アンデスの神殿 広場と基壇

アンデスの神殿は、コトシュ遺跡など基壇型の建築物が有名であり、その増築はタマネギをイメージすると理解しやすい。つまり古い基壇を内側に埋め、外側に拡張するという更新を続けるという特徴を有している。しかし、これまでに調査された神殿の中では最古である

³ ただし現在のペルーでは、出身地で帰属を示すことが一般的である。むしろペルー国民としてのアイデンティティは希薄である。

⁴ あるいは儀礼的な場面で想起される自分たちの起源の場は隔絶した存在であり、現在の政治的な帰属意識とは必ずしも一致しないのかもしれない。

ペルー北海岸のセチン・バホ（図 1）では、一番古い時期の建物として円形半地下式広場が見つかっており、しかも少なくとも時期の異なる広場が 3 つ見つかっている（Fuchs et al. 2008; Fuchs et al. 2010）。円形半地下式広場は、カルル遺跡（図 1）など形成期早期の古い時代の海岸地帯の神殿に多く認められる。なぜ穴を掘り、地面よりも低くするのだろうか。先述のように、形成期早期には土器製作はまだ行われておらず、また広場の中央で炉が見つかるわけでもない。

これまで、基壇型の神殿が建て直される過程が研究の対象となり、研究者はそれを神殿更新という名で呼んできた（加藤・関(編) 1998）。そして半地下式広場は単独で存在するのではなく、基壇と組み合わせる。ペルー中央海岸のルリン川沿いに位置する形成期中期のカルダル遺跡（図 1）のように基壇上に円形半地下式広場が位置する例もある。地面を掘り下げた広場を拡張すれば前の時代の痕跡は残らない。建て直すにせよ、床の高さを前時代の建物よりも上にしなければ、前時代の建物の痕跡は残らない。広場を大きくするためにより深く掘り下げた場合、前時代の建物の痕跡は失われる。セチン・バホの例だと、前の時代の円形半地下式広場をそのまま拡張したのではなく、場所をずらしながら広場を建設したため、広場の重なりが確認できたのである。あえて前の時代の痕跡を残すこと自体に意味があったのかもしれない。あるいは建築の基準線があらかじめ設定されていなかったため、位置を少しずらすことが可能だったのかもしれない。いずれにせよ、最古の神殿に伴う他の建築単位との対応関係を把握する必要がある。

アンデス形成期では神殿を更新する際に、場所を大きく移動させることは想定されない。建て直しの際に、伊勢神宮のように同じ大きさの建物を、場所を代えて建設するのではなく、内部に古い建築を組み込むことによる結果、基壇が大規模化することがこれまで注目されてきた（加藤・関(編) 1998）。しかし、穴を拡大する場合、建物の規模自体がそれほど目に付くことはない。少なくとも遠くから見る場合、基壇のように目立たない。また、基壇の場合、神殿更新に伴い、必要となる建築材や労働力が増加することに注目されてきたが、広場の場合、空間は増大するが、同じ場所であれば、それ以前の壁石を取り外し再利用できるため、必要な建築材が累積的に増加するわけではない。また場所を少し移動して建て直す場合、広場を埋めることで更地にすることも容易である。

広場ではなく基壇型の建物は、更新が行われる度に規模が大きくなる。それは、数百年にわたるプロセスであり、造り始めた人々がはじめから予想し、計画していたのではなく、予期せぬ結果である（渡部 2019）。その場をホーム、あるいは何らかの帰属の場として認識するとしても、時代によって目にする光景は異なる。建物のサイズも、設計も異なるのである。場の認識に人工物がどのように関係するかを検討する際、景観という考え方も参考になろう（Bender 2006）。考古学では特定の遺跡を対象とすることから、過去のある時点の共時的な分析、そして特定の場からの遠心的分析が多いが、ある場を周りから見る視点、求心的な視点も重要である。アンデス形成期の神殿を対象とする場合、神殿が周りからどのように見えるかを踏まえ、景観の創造の結果として、人間集団が形成され、神殿の更新に伴い維持、変容するというメカニズムを議論することもできる。人間は自分が作り出したモノに逆に縛られる、あるいは影響されるという相互関係に着目し、その通時的な変化を追う際に基壇と広場の違いに着目することは有効であろう。穴を掘ることはその空間に目印をつけることではあるが、長期間にわたる変化を考える際には、基壇との違いが浮かび上がる。神殿の

設計図と、社会集団が対応すると想定する意見があるが (Shibata 2014: 91-93)、例えば円形半地下式広場が消滅していく過程を考察するのに有効な視点であろう。

次に神殿と定住の関係について考えてみたい。ここまでの議論は神殿というモニュメントの特徴についてであった。神殿は住むための住居では基本的にないため、定住を前提としない。つまり移動性の高い狩猟採集民や漁労民が建設することも可能である。定住は神殿建設との平行現象、あるいは結果という事例も考えられるであろう。

先に述べたように人類は移動生活が基本であった。そしてそれはネオテニーという概念で説明されることもある。定住の結果、1つの場への興味関心が高まることになった。それによって、他の場所、他の対象への好奇心ではなく、時間への好奇心が顕在化したとも言える。1つの場を媒介し、この場には将来どのような変化が起こるのであるかという好奇心 (それは例えば植物の変化なども含む)、そして過去への洞察 (この場には過去どのような歴史があったのであろうか) など、頭の中で未知のものを考察対象として創り出すことができる。アンデスの場合、例えばペーター・カウリケは形成期の神殿を祖先崇拜と結びつけて考察しているが (Kaulicke 2014)、その場が自分の起源に関わると解釈すれば、神殿を繰り返し更新し、神殿に関与する意味を理解できる。人間が特定の場で作り出した物質的痕跡が、自分の起源に関する人間の知的好奇心を創り上げるきっかけとなり、その場を通じた長期的活動に伴い、思考が進んでいったと想定することができる。特定の場の人工物が媒介となり思考が進むということは、建築物という物質を通じて他者への意識が重要になるということであり、それは人間が社会集団の規模を大きくしていくことと連動する。つまり定住して社会集団の規模が増大したのではなく、むしろ社会集団の規模を増大させるため、換言すれば他者と繋がるために定住したとも考えることができる。旧石器時代には洞窟などが生活に利用されたが、そうした所与の条件の場での生活と、人工物である建築を用いた定住を峻別して考えることが必要である。

人間は人工物、人為的に加工された場を通して、他者を想起、想像する。現代人の移動する意味は、他者との関係においてである (他の文化を知る、あるいは誰も行ったことのない場所に行く、など)。初期のホモ・サピエンスに人のいない世界への移動生活を続けさせたのが、動植物など人間以外の自然への興味関心であったとすれば、定住生活へ導いたのは人間への関心ではなかったか。

現在では、ホームは巨大な世の中の一部を切り取るという形で設定されるため、社会の範囲を閉じる動きと説明できる。初期の定住生活は、人口増大に繋がっていったとすれば、むしろ人々をどんどん呼び込む外に開いた力、そして集まった人々をつなぎ止める凝集的な力、求心的な力が働いたのであろう。アンデスでも神殿を造り始めたのは、はじめは一部の集団であり、逆に造っていなかった集団がマジョリティーであった。しかし時代が進むにつれ、神殿建設の地理的範囲は広がり、神殿での活動に人々は次第に引き込まれ、組み込まれていった。そこに排除のメカニズムはない。組織的武力が欠如した社会であり、誰でも参加できる同族意識のほうが強かったのであろう。また、帰属意識としてのメンバーシップを考える際、神殿に参加する／しないというレベルだけでなく、神殿が同時代に複数共存することで神殿間の競合も生まれ、各神殿での帰属意識も芽生えたのではないか。

定住 (ホーム) と人間集団の規模、他の集団との規模や権力関係、なども今後の課題であ

る⁵。並列的なのか、上下関係か、入れ子状か、モデル化するいくつかの枠組みがあろう。

6. 考察

アンデス形成期では集落跡を見つけることが難しい。そもそも集住の傾向が弱いからである。目立つ遺跡は、神殿などの公共建造物である。従来の説明では、まず定住という段階があって、その後集住し、都市と呼ばれる場に公共建造物が現れたとされた。

これまで農耕が始まれば定住が進むと考えていたが、縄文時代の例が示すように、狩猟採集民や漁労民も定住する。生業以外の要素がどのように関わるかを考える必要がある。本論文では、土地を掘り込み目印をつけるという行為に着目し、定住を促す要因、あるいは定住の程度を高める要因を考察した。縄文の場合は住居であり、アンデスの場合は神殿とその位置づけは異なっているが、いずれにせよ特定の場が起点となったことは確かである。つまり定住する場を追い求めて、そこに落ち着いたのではなく、結果的にそこにいることになった、あるいはそこに縛り付けられたという点を指摘できるであろう。少なくとも、場を媒介として、定住の度合いが高まったことは確かである。

アンデスの場合、大遺跡の多くは宗教的な性格を有している。そして大きく聖と俗に二分した場合、例えば俗に近い住居などの構造物は目立たない。旧世界では宮殿や墓など権力に結びつく構造物が発達したが、アンデスではそうした構造物は神殿と比較すると小規模であり荘厳さで劣る。アンデスでは権力は多くの人々を従えること、その労働力をコントロールすることに向けられた。換言すれば、むしろ権力はモノではなくコトで表されたと説明できる。しかしそれはあくまで、儀礼的側面が先にモノと結びついていた結果そうなったと説明できる。神殿の建設は前 3000 年頃から始まるが、中央集権的政治組織が現れるのは後 1 世紀頃である。神殿の建設と比較して国家の成立がかなり遅れるのがアンデスの特徴である。ただし神殿が古くから発達したからといって、観念が先行し、それが物質に現れ定住化に進んだわけではない。モノ、場所の加工という行為から、結果的に観念的な部分も発達したのである。そして重要な物質は、土であり石であった。そうした自然の要素を加工することと、定住化の動きは平行して進んだ。

本論文では場所を通じた観念と物質の相互関係の 1 つのあり方を定住として捉えた。今後、物質化と定住の関係、その度合い、変化のスピードはどのような要素によって左右されるのか、など検討すべき課題は多い。定住という考えが先にある場合、結果的に定住する場合を峻別し議論する事も今後の研究課題である。また、特定の空間と人間集団の帰属意識との関係、特定の場へのこだわりなどを丁寧に記述していく必要があろう。

⁵ 狩猟採集民は速く移動でき、目が良く、力が強い者が生き残る生活であるが、定住生活ではむしろより多くの集団を形成する遺伝子の方が有利に働いたであろう。脳の働きの変化、あるいは定住生活に伴い他者との関係に関連する遺伝子の頻度に変化が起こった可能性も検討する必要がある。遺伝子を残す、個体の寿命を延ばす、だけではなく、他者への興味により集団を形成することは、比較的小規模な移動民よりも、人口増大に繋がる定住民に顕著に認められる。

謝辞

論文に目を通し貴重なコメントをくださった法政大学の芝田幸一郎氏に深謝する。本論文は 2018 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 の研究成果を含むものである。

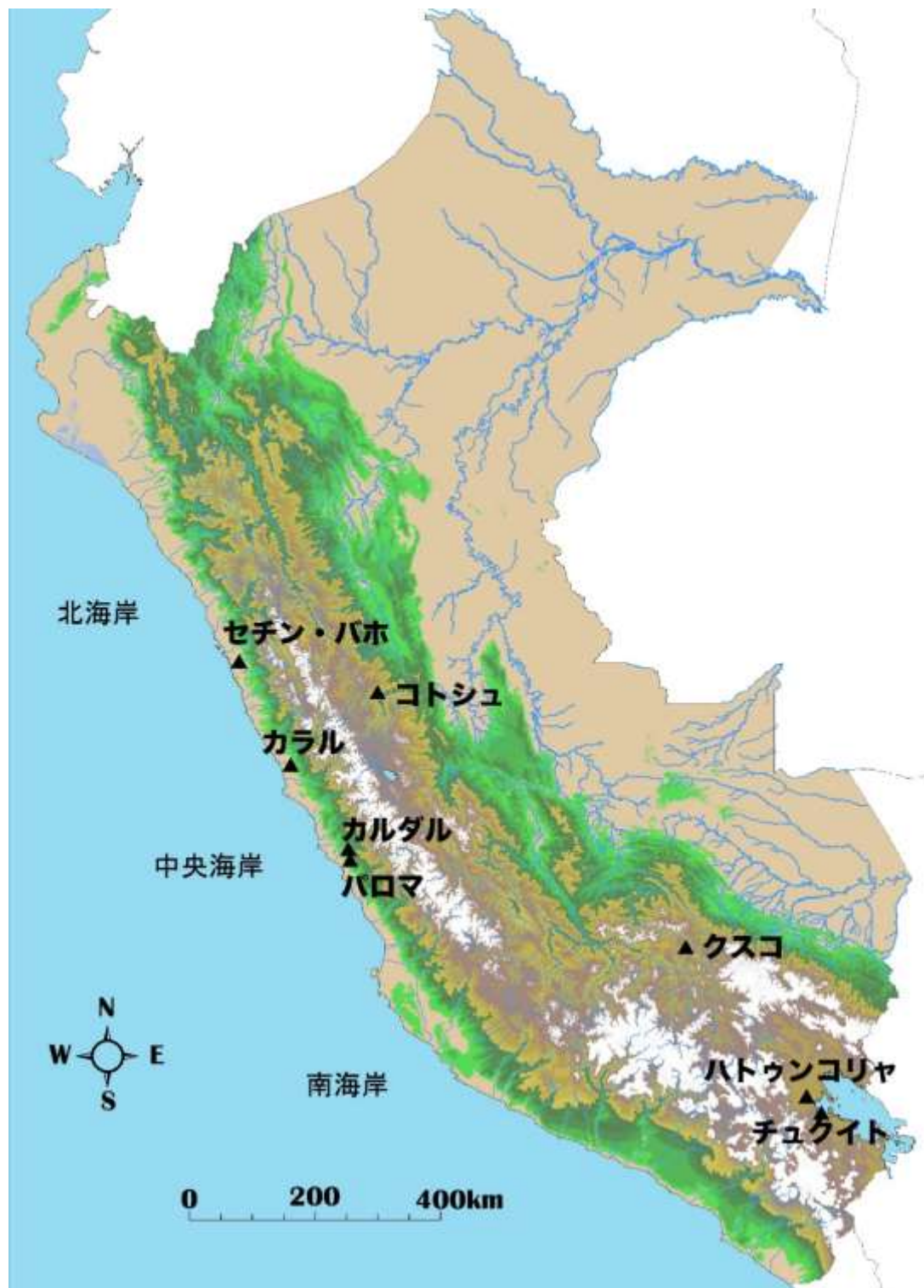


図 1: 本論文で言及する遺跡 (筆者作成)

引用文献

アコスタ (Acosta, José de)

1966 (1590) 『新大陸自然文化史』(大航海時代叢書 III & IV)、上・下、増田義郎訳、岩波書店。

Appenzeller, Tim

2012 “Eastern Odyssey,” *Nature* 485: 24-26.

アリアーガ (Arriaga, Pablo José de)

1984 (1621) 「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」『ペルー王国史』(大航海時代叢書第 II 期 16)、pp.363-606、増田義郎訳、岩波書店。

Banning, E. B.

2011 “So Fair a House: Göbekli Tepe and the Identification of Temples in the Pre-Pottery Neolithic of the Near East,” *Current Anthropology* 52(5): 619-660.

Bauer, Brian S.

1998 *The Sacred Landscape of the Inca: The Cusco Ceque System*, Austin: University of Texas Press.

ベルウッド, ピーター (Bellwood, Peter)

2008 (2005) 『農耕起源の人類史』、長田俊樹・佐藤洋一郎監訳、京都大学学術出版会。

Bender, Barbara

2006 “Place and Landscape,” In C. Tilley, W. Keane, S. Küchler, M. Rowlands & P. Spyer (eds.), *Handbook of Material Culture*, pp.303-314, Los Angeles: SAGE.

チャイルド, ゴードン (Childe, Gordon V.)

1957 (1936) 『文明の起源』(改訂版)、ねずまさし訳、岩波書店。

D'Altroy, Terence N. (ダルトロイ、テレンス・N.)

2012 「インカ帝国の経済基盤」、島田泉・篠田謙一(編)『インカ帝国——研究のフロンティア』、竹内繁訳、pp.121-149、東海大学出版会。

2015 *The Incas*. Second Edition. Malden & Oxford: WILEY Blackwell.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Claudia Schmits, Germán Yenque & Jesús Briceño

2008 “Investigaciones arqueológicas en el sitio de Sechín Bajo, Casma,” *Boletín de Arqueología PUCP* 10 (2006): 111-135.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Germán Yenque & Jesús Briceño

2010 “Del Arcaico Tardío al Formativo Temprano: las investigaciones en Sechín Bajo, valle de Casma,” *Boletín de Arqueología PUCP* 13 (2009): 55-86.

藤森 照信

2005 『人類と建築の歴史』、筑摩書房。

藤本 強

2007a 『ごはんとパンの考古学』、同成社。

2007b 『都市と都城』、同成社。

藤尾 慎一郎

2002 『縄文論争』、講談社。

ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ, インカ (Garcilaso de la Vega, Inca)

2006 (1609) 『インカ皇統記』、牛島信明訳、計4巻、岩波書店。

後藤 明

2003 『海を渡ったモンゴロイド』、講談社。

Haas, Jonathan & Winifred Creamer

2006 “Crucible of Andean Civilization: The Peruvian Coast from 3000 to 1800 BC,”
Current Anthropology 47(5): 745-775.

Haas, Jonathan & Winifred Creamer

2012 “Why Do People Build Monuments?: Late Archaic Platform Mounds in the
Norte Chico,” In R. L. Burger & R. M. Rosenswig (eds.), *Early New World
Monumentality*, pp.289-312, Gainesville: University Press of Florida.

Haas, Jonathan, Winifred Creamer, Luis Huamán Mesía, David Goldstein, Karl
Reinhard & Cindy Vergel Rodríguez

2013 “Evidence for Maize (*Zea Mays*) in the Late Archaic (3000-1800 B.C.) in the
Norte Chico Region of Peru,” *Proceedings of the National Academy of Sciences*
110(13): 4945-4949.

井口 直司

2012 『縄文土器ガイドブック——縄文土器の世界』、新泉社。

Ikehara, Hugo, Fiorella Paipay & Koichiro Shibata

2013 “Feasting with *Zea Mays* in the Middle and Late Formative North Coast of
Peru,” *Latin American Antiquity* 24(2): 217-231.

今村 啓爾

2002 『縄文の豊かさと限界』、山川出版社。

稲村 哲也

1995 『リャマとアルパカ——アンデスの先住民社会と牧畜文化』、花伝社。

Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Jessica Munson, Melissa
Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Flory Pinzón & Hitoshi Yonenobu

2015 “The Development of Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Co-
Existing Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala,”
Proceedings of the National Academy of Sciences 112(14): 4268-4273.

Izumi, Seiichi & Toshihiko Sono (eds.)

1963 *Excavations at Kotosh, Peru, 1960*, Tokyo: Kadokawa-Shoten.

Izumi, Seiichi & Kazuo Terada (eds.)

1972 *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*, Tokyo: University of Tokyo
Press.

Julien, Catherine J.

- 2004 “Identidad y filiación por suyu en el Imperio Incaico,” *Boletín de Arqueología PUCP* 6 (2002): 11-22.
- 加藤 泰建・関 雄二(編)
- 1998 『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』、角川書店。
- Kaulicke, Peter
- 2014 “Memoria y temporalidad en el Período Formativo centroandino,” In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*, Senri Ethnological Studies 89, pp.21-50, Osaka: Museo Nacional de Etnología.
- Lahr, Marta Mirazon & Robert Foley
- 1994 “Multiple Dispersals and Modern Human Origins,” *Evolutionary Anthropology* 3(2): 48-60.
- Leonard, Jennifer A., Rober K. Wayne, Jane Wheeler, Raúl Valadez, Sonia Guillén & Carles Vilà
- 2002 “Ancient DNA Evidence for Old World Origin of New World Dogs,” *Science* 298: 1613-1616.
- マコフスキ, クリストフ (Makowski, Krzysztof)
- 2012 「都市と祭祀センター——アンデスにおける都市化についての概念的挑戦」、渡部 森哉訳、『年報人類学研究』2: 1-66。
- Martin, Paul S.
- 1973 “The Discovery of America,” *Science* 179: 969-974.
- 三宅 裕
- 2015 「西アジアにおける神殿の出現——新石器時代の公共建造物をめぐって」、関雄二(編)『古代文明アンデスと西アジア——神殿と権力の生成』、pp.41-86、朝日新聞出版。
- Murra, John V.
- 1972 “El “control vertical” de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas,” In J. V. Murra (ed.), *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562, por Iñigo Ortiz de Zúñiga*, Documentos para la Historia y Etnología de Huánuco y la Selva Central 2, pp.429-476, Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizán.
- 西田 正規
- 2007 『人類史のなかの定住革命』、講談社。
- 岡田 宏明
- 1995 「北アメリカでの拡散」、大貫良夫(編)『モンゴロイドの地球 5——最初のアメリカー人』、pp. 117-153、東京大学出版会。
- 大越 翼
- 2003 「聖なる樹の下で——マヤの王を考える」、角田文衛・上田正昭(監修)『古代王権の誕生 II——東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編』、pp. 169-205、角川書店。

大貫 良夫・関 雄二

- 1992 「アメリカ大陸における初期の人類」、赤沢威・阪口豊・富田幸光・山本紀夫(編)
『アメリカ大陸の自然誌 3——最初のアメリカ人』、pp. 105-190、岩波書店。

Oppenheimer, Stephen

- 2009 “The Great Arc of Dispersal of Modern Humans: Africa to Australia,”
Quaternary International 202: 2-13.

Pärssinen, Martti

- 1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization*, Studia Historica
43, Helsinki: Societas Historica Finlandiae.

Quilter, Jeffrey

- 1989 *Life and Death at Paloma: Society and Mortuary Practices in a Preceramic
Peruvian Village*, Iowa City: University of Iowa Press.

Ramírez, Susan Elizabeth

- 2001 “El concepto de "comunidad" en el siglo XVI,” In H. Noejovich Ch. (ed.),
América bajo los Austrias: Economía, Cultura y Sociedad, 50o Congreso
Internacional de Americanistas, Varsovia, Polonia – 2000, pp.181-189, Lima:
Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the
Andes*, Stanford: Stanford University Press.
- 2007 “It's All in a Day's Work: Occupational Specialization on the Peruvian North
Coast, Revisited,” In I. Shimada (ed.), *Craft Production in Complex Societies:
Multicraft and Producer Perspectives*, pp. 262-280, Salt Lake City: The
University of Utah Press.

レンフルー, コリン (Renfrew, Colin)

- 1993 (1987) 『ことばの考古学』、橋本槇矩訳、青土社。

Salomon, Frank

- 1991 “Introductory Essay: The Huarochirí Manuscript,” In F. Salomon & G. L.
Urioste (eds.), *The Huarochirí Manuscript: A Testament of Ancient and
Colonial Andean Religion*, pp.1-38, Austin: University of Texas Press.

Savolainen, Peter, Ya-ping Zhang, Jing Luo, Joakim Lundeberg & Thomas Leitner

- 2002 “Genetic Evidence for an East Asian Origin of Domestic Dogs,” *Science* 298:
1610-1613.

Schmidt, Klaus

- 2009 Göbekli Tepe: santuarios de la Edad de Piedra en la Alta Mesopotamia,
Boletín de Arqueología PUCP 11 (2007): 263-287.

Seki, Yuji (ed.)

- 2014 *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arc
aicoy Formativo*, Senri Ethnological Studies 89, Osaka: Museo Nacional de
Etnología.

関 雄二

- 1995 「中部アメリカ・南アメリカでの拡散」、大貫良夫(編)『モンゴロイドの地球 5—最初のアメリカ人』、pp. 155-198、東京大学出版会。
- 2012 「最初のアメリカ人の探求」、印東道子(編)『人類大移動——アフリカからイースター島へ』、pp. 61-82、朝日新聞出版。
- 2013 「最初のアメリカ人の移動ルート」、印東道子(編)『人類の移動誌』、pp. 206-218、臨川書店。

Shibata, Koichiro

- 2004 “Nueva cronología tentativa del período Formativo - aproximación a la arquitectura ceremonial,” In L. Valle Alvarez (ed.), *Desarrollo arqueológico costa norte del Perú 1*, pp.79-98, Trujillo: Ediciones SIAN.

祖父江 孝男

- 1971 『県民性——文化人類学的考察』、中央公論新社。

Stringer, Chris

- 2000 “Coasting out of Africa,” *Nature* 405: 24-26.

渡部 森哉

- 2010 『インカ帝国の成立——先スペイン期アンデスの社会動態と構造』(南山大学学術叢書)、春風社。
- 2014 「ワリ帝国の行政センターと地方統治——ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」『古代アメリカ』17: 25-52。
- 2017 「アンデスの特徴に関する考察」『古代アメリカ』20: 57-78。
- 2019 「文明の誕生——古代アンデスの事例から」『史林』102(1): ページ数未定。

山極 寿一

- 2013 「移動の心理を霊長類に探る」、印東道子(編)『人類の移動誌』、pp. 38-47、臨川書店。

米田 穰

- 2013 「同位体生態学からみた人類の移動——食生態の進化が支えた人類の拡散」、印東道子(編)『人類の移動誌』、pp. 315-327、臨川書店。

Zuidema, R. Tom

- 1964 *The Ceque System of Cuzco: The Social Organization of the Capital of the Inca*, Leiden: E. J. Brill.

Keywords

temple, semisubterranean plaza, pit dwelling, ceramic, *huaca*